

文章表現の基底にあるもの

——「国語表現」の授業からの考察——

高橋 由美

1 はじめに

この四月から高等学校の教壇に立ち、現在、二年生の国語Ⅱと三年生の国語表現を受け持っている。本稿は、国語表現の授業（必修2単位・一クラス）において、一学期に行った二つの単元に関するものである。

△生徒の実態▽

勤務校は、各学年三クラス（普通科一、家政科一）、クラス三十名ほどの小規模校である。四月当初、担当した生徒たちの課題を、国語科の立場から次のように捉えた。

①授業は成立するが、文字の表記・文章の構成に関する基礎的な課題が多い。②授業の内容を介した、生徒相互の交流があまり見られない。③テキストに触れたとき、自分の中に生じた感覚や自分の中にあつた思いを自分のことばで語れない。①によって、初めから論理を求めるものや長いものを書かせることはできないと感じ、②の課題を考えたとき、「自分のことば」で表現したものが友人たちに認めら

れるという体験の必要性を感じた。③の課題は、他教科や日常生活の中でも見られることであり、自分が考える過程を意識しようとせず、正解のみを覚えようとする、友人や教師の作った正しい答えを借りようとする、などとなつて表れている。生徒たちは、完成された型のみを求め、身につけようとしているように見えた。

△国語表現でできること▽

国語表現の授業は、このような生徒たちの課題を担うことが出来ると考える。なぜならば、自己を表現することが目標となり得るし、生徒が表現したものを授業の場ですべていくことによって、生徒それぞれの「自分のことば」による交流を図ることができるからである。国語表現では、生徒たちに、型を用いながらも型にはまらない自分を出していくこと、自分の中を通り抜けたことばで自分の中にあるものを表現することを要求していくべきではないかと感じるようになった。

△単元を通じてのねらい▽

このような生徒たちの課題を踏まえ、稿者が四月当初に持っていたねらいは、次のようなものであった。

①文章を書くことに対して構えず、授業を、何よりも楽しんで書く場に行うこと。

②生徒それぞれが「自分のことば」で書いた作品を通して、生徒同士を交流させ、お互いを認め合えるような雰囲気をつくること。

ねらいをこのように持ちながらも、初めての体験ばかりで意図しないことも多く起こった。よって、本稿では、(一)それぞれの単元で稿者のねらいがどのように実現されたのかに加え、(二)ねらいとしなかったことがどのように表れたのかについても考察する。そして、高校生の文章表現はどのようなものに支えられているのか、考えてみたい。

2 単元の実際

I ものやことがらを定義する―△国語辞典▽づくり―

初めての単元では、身のまわりのものやことがらを自分たちで定義する△国語辞典▽を作ることにした。国語表現を、全員が参加できる、何とか楽しい時間に行いたいという願いから出発した単元である。

△ねらい▽

四月当初に持っていたねらいは、この単元では次のよう

な形になった。

①辞書に載せたい項目を、生徒にも自由に選択させること
によって、自分が表現したいものを楽しんで書く。

②互いに相談しながら書くこと、完成した辞典を読み合う
ことによって、作品を通じて生徒相互の交流をはかる。

△単元の流れ▽ (4月13日～5月2日 6.5時間扱い)

I 学習の方法を知る (1時間)

・ものやことがらの定義集△国語辞典▽を作ることを告げる。

・「右」「サツカー」二つのことばを生徒に定義させ、三種
類の辞典の定義と比較する。

・『悪魔の辞典』と他校の生徒作品とをプリントしたものを
配布し、辞典のイメージを作る。

△資料1 参考プリントの一部▽

国語表現参考プリント

4. 15 (1)

*このような辞典もあります。(『悪魔の辞典』(A・ピアス著)より)

☆背巾 (BACK) ……自分が落ち目になったとき、つくづくと悔めることが許される友人の体の一部。

☆キヤベツ (CABBAGE) ……大きさがほぼ人間の頭に匹敵するおなじみの菜園野菜。

☆臍 (OMI) ……自分に辛いことがあったとき、臍とほし用に自然が備えてくれた、ふんわりとし、決してこわれることのない自動人形。

☆幸福 (HAPPINESS) ……他人の不幸を見ているうちにわき起こる快い気分。

☆心臓 (HEART) ……自動防内式血液ポンプ。

☆タバコ (CIGARETTE) ……国家が国民に売りつける幣。

☆恋愛 (LOVE) ……患者を結婚させるか、あるいはこの病気を抱いた環境から移すことによって治すことができる、一時的な病気。

☆一年 (YEAR) ……三六五回の失望からなる一区切りの期間。

II △国語辞典▽の原稿を作成する (3時間)

・△国語辞典▽原稿カードに、指導者が項目を書き込んだものをシャッフルして一人三枚ずつ配る。さらに、生徒自身が辞典に加えたいと思うことを一つ選ばせ、それが計四枚の原稿カードを作成する(友人や指導者と相談しながら作業を進め、カードは友人と交換してもよいことにした)。

△資料2 国語辞典原稿カード▽

No.

①科目()、世界史、日本史、地理、政治、経済、社会

また、また呼び子、社会の中で、得意と苦手が存在する人が多い。

②世の中、マスメディアによって、情報もえんばえるほど自分の社会にいろいろとびくびくする。

「国語辞典」原稿

おもしろい、詳しく、書きかえよう、ひかり、書きかえよう、オリジナリティ、豊かなり。

△項目▽社会

製作者：() 苗名前 () 国語辞典

III △国語辞典▽の原稿を校正し、友人の作品を読む

(1時間)

・△国語辞典▽の原稿(生徒の書いた原稿を指導者がワープロで打ち直したもの)を校正しつつ友人の作品を読む。

△国語辞典▽の項目の中から優秀作品だと思ふものを選び、簡単なコメントを書く。

IV 投票の結果を知り、学習のまとめをする (1時間)

・「優秀作品への投票」結果のプリントを読む。

・学習のまとめとして、宣伝コピーを作成し、辞典の「はじめに」か「終わりに」どちらか一方を選択して書く。

△資料3 国語辞典「はじめに」「終わりに」▽

<はじめに>

◇この本は、国語学習の授業でむりやりやらされたにもかかわらず、辞書にもわかりやすく楽しく読んでもらえるように35人の生徒が、知恵をしぼり、協働に協働で作り上げた血と汗と苦悶の結晶である。

◇この辞典を編くにあたって、まず第1にハンカチを用意しておきましょう。この辞典は、言葉の意味だけではなく、人間の心理を深くついた、なかなかユーモアにあふれた辞書です。読用時は、あまり多量の紙で活用しないことをおすすめします。気持ちも晴れんが、笑顔を取り戻すことが可能な本です。現代人の心のパイプと言えなく、現代人を理解するための辞書である。

◇ 後序
We are school生活にとって、辞書をするっていうことはとっても大切なこと。それによって言葉を通じ合うことができ。しかし、この辞典ができたことによって、また新しい国語の習い方を見つけた。今回の制作には三年二組一同のご参加があったのもあって、これには、強く感銘し上げることにし、謝意を表したい。ちなみに、これはすごい。

<おわりに>

◇ 作者から
辞典の意味を作るのなかなか大変だと思いましたが、苦心したところは…そうでしたね、全部ですね。面白かったことは…十人十色だと思えました。人それぞれがどんなことを日常考えているのかがよく分かったので面白かったです。

◇この辞典は、先生が出した課題以外にも、自分で考えたものも書いたので、良いものだと思つた。でも、ジョークがあまりうまく書けなかったので、苦心した。

◇はじめの授業で、「石」を説明して貰われて、私はすごく考えて思つた。石を聞いたとき実にある方と書かれると、あっそうかと思つた。普段、何も考えずに使っている言葉とかも、少しだけ立ち止まって考えてみるのもいいかなと思つた。

◇辞典づくりは、私の考えもしなかったような発想がいろんな人から出てきて、みんなの考えとかがわかって面白かった。どうやらそんな考えとかでみんなだろうって思つたりして、みんなの考えは本当に十人十色だと思つた。

◇この授業はたのしかったと思う。みんなと相談したことがよかった。

V △国語辞典▽を製本し、帯をつける (0.5時間)

・表表紙、裏表紙、本文、「はじめに」、「おわりに」を綴じ、辞典のコピーを読んで帯をつけて冊子を作成させる。

いては、辞典にあるような型どおりの説明 (a) をしたのもあったが、自分の体験を書いたり社会現象やそのことばから想像できること (b) などを書いたものも多かった。(例) としてそのことばの遣い方を書く。(類) として類義語を示す、意味に①②③の番号をつけるなどは、辞典にヒントを得た生徒の工夫である。

(a) 型通りの説明：バイク／入学／文化祭／広島弁／おにぎり／車／社会

(b) 自己の体験：マクドナルド／酔っぱらい／給料／クリスマス／英語／お正月／お弁当／大人／カッターメン／ガム／恋人／生徒

(c) (a)+(b)：かきの種／夏／犬／カレーライス／校則
一面的な説明になっていたり、ことばが足りないものも多いが、生徒たちの日常生活がよく表れた辞典に仕上がったと思う。ただし、生徒たちの内部にあるものを楽して取り出すことはできたが、自己や社会に対する深い洞察や新しい認識を得るといふ楽しさには至っていない。

*ねらい②について

自分の席で一人で書くということにとらわれなかったためか、友人と話す中でヒントを得たり、思わぬ発見もあったようである。指導者も、生徒たちと自由に話をする事ができ、緊張感もやわらいでいった。

お互いの作品を読み合って優秀作品を選ぶ時間 (Ⅲ次)
や、優秀作品投票の結果をまとめたプリントを読む時間 (Ⅳ

次) では、名前を出すことはしなかったが、友人の作品に興味を持ち、楽しんで読む生徒たちの姿を見ることができた。また、普段あまり目立つことのない生徒の作品が高得点を得ていたということもあり、お互いに感心したりされたりという場ができたのではないかと思う。お互いの作品に関心を持ったということは、辞書につけた「おわりに」からもうかがえる。

・私の考えもしなかったような発想が、いろんな人から出て、みんなの考えとかがわかって面白かった。

・いろいろな、自分では考えつかないような表現で書かれていたので、面白かった。みんな考えて書いたので、一つ一つに一人一人の個性が出ていてよかった。

作品を通して交流が行われ、「自分のことば」が認められる場ができたといえそうである。

(2) ねらいとしなかったことがどう表れたか

指導者は、△国語辞典▽ということ、項目を五十音順に並べて冊子にすることしか予定していなかった。ところが、原稿を△国語辞典▽として冊子にすると告げると、ある生徒が、「辞典のようにするなら、辞典には帯がついている」と言ってきた。「右・サツカー」の定義をつくった時間 (Ⅰ次) に三種類の辞典を見せたこと、生徒が使うことはほとんどなかったが、その後も辞典を教室に持ち込んでいたことから、このような発言が出たのかもしれない。この発言があつて、全員で△国語辞典▽の一言コピーを書き、

帯に印刷してつけることにした。また、単元の終わりに感想を書かせ、今後の参考にしようとしていたが、感想ではなく、辞典の「巻頭言」「おわりに」に合わせて「国語辞典」の「はじめに」「おわりに」を書かせることに変更した。少しでも辞典の体裁に近くなるようにしたのである。小さな発言ではあったが、生徒の意識が、国語辞典という身近にある言語文化へ向けられたのではないかと感じた。

II 広告をよむ—「広告批評集」づくり—

辞典づくりの単元で、生徒たちが国語辞典という身のまわりの言語文化に目を向けたことから、次の単元では、生徒たちの生活の中で最もよく目にすると思われる言語文化—「広告」を教材にできないかと考えた。それがこの単元である。

「ねらい」

この単元では、四月当初に持っていたねらいが、次のように変化した。

①身近にある広告に興味を持ち、表現の面白さを考えて広告を批評する。

②一つの広告を二人で別々に分析することによって、友人の広告の見方に学ぶ。

「単元の流れ」(5月7日～6月16日 8時間扱い)

I 学習の方法を知る(0.5時間)

・新聞や雑誌の広告を見ていくことを告げ、自分が気に

入った広告を探しておくことを指示する。

II 広告を見ながら分析の観点を考える(1時間)

・指導者が用意した数種の広告を見ながら、好悪や印象、気づきなどを自由にあげさせ、広告を分析する際に、どのような観点で見ればいいのかを考えさせる。ここで作った分析の観点到指導者が手を加え、次時から用いる学習プリント「広告分析表」を作成した。

III 「広告分析表」をつくる(4時間)

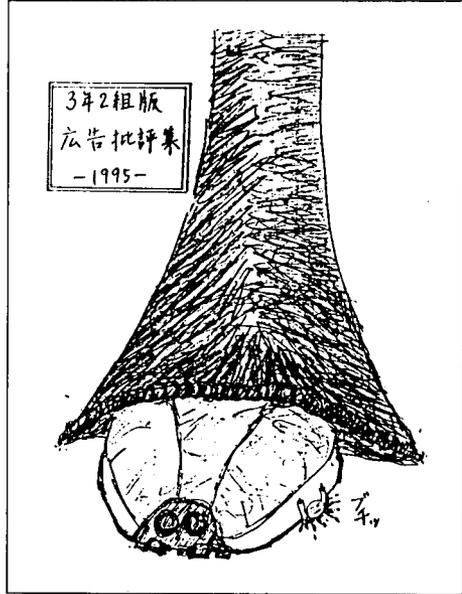
・指導者による広告分析を読む。

・各自が持参した広告を見ながら「広告分析表」を作成する。「広告分析表」は、B4用紙にB5サイズで二枚印刷した。一人が分析した同じ広告を、別の一人が後で分析できるようにするためである。

・左側の「広告分析表」が完成したら、色画用紙にその表と広告とを貼って提出する。全員提出の後、指導者がシャッフルして配り、友人の広告とその分析とを見ながら、自分の分析を右側の表に書き込む。

IV 友人の作品を読み合う(2時間)

・表紙をつけ、「広告批評集」を製本する。



・二人ずつによる分析表を、それぞれの見方の違いを比較しながら全員で検討する。

V 学習のまとめをする (0.5時間)

・JAC (日本広告業協会) の新聞広告を読み、学習のまとめとして、「自分にとって広告とは何か」「学習を終えての感想」を書く。

△分析と考察▽

(1) ねらいがどう実現されたか

*ねらい①について

広告のコピーや文章の効果について、生徒たちの分析に

は、例えば次のような説明がある。

・秦岡信也：「日産ミストラル」

商品名 (ミストラル) を、岡村孝子のCD (CDのタイトルが「ミストラル」) のライナーノーツを用いて解説している。

また、学習後の感想から広告への新たな興味がかげえる。

・今まで、広告について何も考えずに見ていたけど、この授業をして送り手がどんなことを考えて広告をつくっていったかを知ることができたので、これからはもっといろんなことを発見していきたい。(大森弥生)

・この授業をやるまでは、見逃して何も感じなかったけど、これからは少し見方が変わってくると思う。この広告のねらいなど、考えてしまう。(重信裕子)

・今まで広告なんて、ただ見ていただけだったけど、授業で、作者のねらいを読んだりして、けっこう意味が深いものなんだと思った。(池ノ迫信治)

生徒たちの「広告分析表」と学習後の感想とからうかがえるのは、広告のコピーや文章の持つ効果、広告の送り手のねらいを見つけて出したことによる面白さや楽しみである。

身のまわりの言語文化に近づき、楽しんだという点では意味があつたといえる。しかし、これは広告そのものに留まる問題である。魅力的な広告、面白い広告、と生徒たちは感じているが、そのような広告が自分たちの欲望を作り出してしまふこと、意識の内部に入り込んで自分たちの考え

方まで形成してしまうかもしれない恐ろしさは感じていない。さらにいえば、社会を変える力をも持っていることなどにも気づいていない。今回の単元では、生徒にここまで要求することはできなかった。指導者である私も、広告が持っている力の大きさについて単元を進めながら気づいていったのである。国語の力を言語生活の力としてとらえるとき、広告のコピーや表現を分析できることだけが力なのではなく、広告のことばを、自分や社会と広告との関係という次元において意味づけることが重要な力であるといえる。現在はこのような感じている。

*ねらい②について

友人の作品に対する反応は、学習後の感想に次のように表れる。

・ 広告をよく見ると、こんなにいろいろな事が分かるものなのかと関心した。それに、他の人の広告についての見方などが見れて、良かった。(佐川明正)

・ 普段、自分が考えているのとは全然違う考えをみんなが持っているというのが分かって、面白かった。同じ広告でも、二人が批評すれば二通り、三人だと三通りのどこか違う考えがあつて、びっくりしたり、感心させられたりした。(津田歩)

・ 批評集は結果、一目で一人一人の個性が分かるように仕上がった、と思う。(山下梨江)

自分で選んで分析した広告を、別の生徒が再び分析するようにしたため、自分が苦労して分析した広告を友人はどう

見たのか気になったようである。自分に回ってきた友人の広告とその分析を見て、感心したり驚いたりする場面もあった。また、この単元では、完成した八広告批評集▽を二人の分析の違いに注目しながら読むという時間を設定し、全員の作品を読んだ。②「友人の見方に学ぶ」のようなねらいを設けた場合、冊子をつくって終わるのではなく、作成後の授業が重要であることを改めて感じた。

(2)ねらいとしなかったことがどう表れたか

この単元の後の中間試験では、問題の一つとして「二十歳の献血キャンペーン」(読売ベルディの武田修宏選手がユニフォーム姿で献血手帳を手持っている)の広告分析を出題した。テストを返却する際、解答例を示しながら説明すると、生徒たちの何人かが「私(僕)もそう思ったけど、うまく説明できなかった」と発言した。「武田選手がこの宣伝をするのは何となく合っている」「武田選手を使っているのがいい」としか表現できなかった生徒たちである。具体的に、「武田選手の明るさ、力強さ、元気が献血のPRに役立っている」と説明したかったのであるが、写真やコピーから感じたこと、それらが訴えてくることを文章にしようとしたこの学習は、彼らの中にある「これを説明したい」という思いをことばにできないもどかしさや心の中に生じた思いにことばを与える難しさに気づかせることとなった。また、広告の中でも特にコピーの短く的確な表現や面白さに気づくこと、広告のことばの効果を説明することを単

元でつきたいことばの力として想定していた。広告のコピーと写真とが切り離せないのは当然であるが、写真に關しては、見なくてもわかるぐらいに写真を詳しく説明させること、写真とコピーやほかの文章との關係を説明させることを予定してただけであつた。しかし、生徒たちの「広告分析表」を見ると、コピーよりも写真に注目して広告を分析したと思われる作品が多い。

・この狙いは、まだ幼い女の子の色けでこの水をかわそうとしてゐる。純粹なかんじを16才ぐらいの女の子とスクール水着で表現してゐる。(中略)この広告の絵は、女の子たちは、かつてといつてゐるようだ。白黒で、天然物というのが表現されてゐる。(和田武士・「南アルプスの天然水」水着姿の女の子たちのモノクロ写真に注目)

・コンピュータの置かれてゐる部屋は、今どきの若い女の人の部屋で、観葉植物や英語の本があり、雑誌に出てくるようなおしゃれな部屋を表してゐる。コンピュータといへば機械で特別つて感じだけど、これは受け手に違和感を与えないようにされてゐる。若い女の人が中央にいて、コンピュータと合わせることにより、キャリアウーマンというイメージを与えてゐる。女の人がきちんとした服じゃないのが、若い世代にアピールするにはいい方法だから。(平仙奈穂・「IBMのコンピュータ・アプティバ」コンピュータのあの部屋の雰囲気と女性の服装に注目。)

生徒たちは、コピーや説明の文章よりも、写真や広告の

持つ雰囲気からメッセージを感じとつてゐることがわかる。それが、生徒たちの表現したいことだつたのではないか。

3 考察

(1) 言語生活への志向

当初のねらいではなかつたが、国語辞典づくりの際には、生徒たちが目にする辞典の装丁や表記方法を、自分たちの辞典にも取り入れようとする姿を見ることができた。さらに、報告したこの二つの単元の後の「絵を見て物語を作ろう」では、自宅にある絵本を参考に表記を工夫(分かち書きにしたり、対象年齢を考へて漢字を制限するなど)した生徒もいた。いずれも、授業という枠をこえて、身近にある言語文化へ目を向けてゐると考えられる。このほかにも、言語文化から生徒たちが受けとめることのできるものは多くあるはずである。それらを取り出し、学校での授業内容と関連させることができれば、それが言語生活の中で働く力になるのではないかと感じてゐる。

(2) 言語生活の中で働く力

身近にある言語文化への志向を見ることはできたが、それが言語生活の中で生きて働く力になり得たのかどうかという点においては疑問が残る。辞典づくりでは、生徒たちは、自分たちの内部にあるものを楽しんで取り出してはいるが、そこから自分たちにとっての新しい認識を得ては

ない。広告批評では、広告の面白さを楽しんだが、広告自体が持つ力やトリックのようなものには目を向けていない。これらから考えると、二つの単元で得た力は生徒たち自身と教材との間にとどまるものであり、外に向かう力となり得ていないのではないか。二つの単元での学習をさらに進めて、ことばの学習を通して社会を見ることができれば、それが言語生活の中で生きて働く力になるはずである。

(3) 典型と典型をこえるもの

辞典づくりや広告批評では、楽しんで表現しユーモアあるとらえ方を見せてくれた生徒たちであったが、この後、二学期に実施した「高校生活の思い出」(卒業文集のための作文)の原稿を見ると、この二つの単元からはほど遠い画一的な文章が並んだ。書いている最中に、「書くことがない」「どう書いたらいいのかわからない」という声を聞くことも多かった。この違いは何なのか。文集の原稿によく見られる表現「〜が楽しかった」「〜がよかった」「これから〜を大切にしたいと思う」などは、「作文」の表現の典型とも呼べるものだと思う。「高校生活の思い出」というタイトルを与えられた途端、生徒の表現は型にはまってしまった。二つの単元で生徒たちの表現の個性であり魅力だと感じたのは、典型をこえる部分であったのかもしれない。今後の指導では、典型を守りつつ典型をこえることについて考えてみたい。

(広島県豊田高等学校)